哲学カフェ＠名古屋 レビュー

テーマ「環境は誰のものか？」

文責：奥田太郎

2014 年 11 月 22 日（土）、カフェティグレ伏見店にて開催された哲学カフェでは、「環境は誰のものか？」をテーマとして対話が重ねられた。前日までに、哲学カフェ＠名古屋のウェブサイト上にて提起された以下の７つの問いを一応の参照点として掲げてから、対話をスタートさせた。

① 環境は「モノ」か。「モノ」とは何か？可視化できるもの？形があるもの？場所を占有するもの？素材のようなもの？なのか？

② 《ご案内》では、環境は恵みを与えてくれるもの、有益な資源という部分に焦点をあてているが、それは何故か？東日本大震災の地震・津波、御嶽山の噴火など災いをもたらし、恐竜をはじめ生物種を絶滅させる面を看過するのは何故か。重金属類あるいは「紫外線」など「環境」には有害なものも溢れている。やはりなぜ看過して、環境を有益な資源として利用という側面に前のめりになるのか？無害無益な環境の余地はないのか？

③ なぜ「所有」を真っ先に考えがちなのだろうか？なぜ「利用」「使用」「影響」を後回しにするか、付随するものとして考えるのだろうか？

④ 環境を所有する、利用する「権利」ばかり考えがちなのは何故か？環境を利用することへの「責任」、所有することの「責任」、所有者・利用者の「義務」が後回しなのは何故か？

⑤ 「環境は誰のものか」という問いの前提として、さらに「所有者が自由に利用（処理）してよい」という前提があるが、その前提がおかしいのではないか？

⑥ 「環境は○○のモノである」という主張や意見が対立し一致しない・調整できない場合、どうするのか？多様な意見や価値観がぶつかりあって、それぞれが正しいことを主張して平行線を辿るなら、環境問題はどうやって解決すればよいのか？

⑦ ⑥と同様に「環境は誰のものか」という問いに正解が出せない場合、地球環境問題であれ、生物多様性の保持であれ解決するための方法や智恵はないのか？

＊哲学カフェ＠名古屋ウェブサイト フォーラムでの山方氏の書き込みを若干改変

進行役として私が感じた印象を述べると、対話の全体的な流れは以下の通りである。前半は、「環境」とは何かについて語られ、その後、「誰のものか」という問いかけに絡んで、経済や所有についてのやりとりが発生し、それら２つのやりとりが交錯しつつ展開した。そこから終盤に向かって、話題は所有へのフォーカスを強めていき、最終的には、“所有と責任”というトピック

に辿り着いた。

こうした流れの中で、以下の論点が私の印象に強く残った。

- **「環境」とは何か？**
  - 人間から影響を受けるもの、あるいは、主体を取り巻くもの　→当該対象の利用可能性や価値づけ可能性があるということが前提になっているのではないか？
  - 具体的には、森林や水を想起することもあれば、衣服や家屋、人間関係もそこに含めることもある。　→人間関係は環境に含まれるのだろうか？
  - “草木国土悉皆成仏”という発想から見れば、すべてのものに仏性が宿っているわけだから、自分も含めてすべて環境であると考えることもできるのではないか？
- **「誰のものか」とはどういうことか？**
  - このような問いは常に、自分より劣るものを対象として発せられるものではないか？
  - この問いは、経済学の視点から見られた経験的な問いとして限定的に扱われる問いでもある。　→経済はモノ化（それによって対象を把握可能なもの、管理可能なものとする操作）を前提としているが、モノ化は現状固定的であるのに対して、環境は流動的であるから、環境を経済で扱うことが難しいのではないか？
  - 所有は時として争いの火種になる。それは、所有の不完全性ゆえではないか。所有にはそれを認める権威が不可欠である。(cf. 土地の囲い込みによる私的所有権の発生)
    - 環境は、誰もが好き勝手に使えてしまうがゆえに、それを利用する「権利」を明確にしておかなければならない、という実践的要請がある。
    - そうした要請に応える際に、私的所有権の論理の果てに発生した問題を、当の私的所有権の論理で対処しようとしてしまっているのではないか？
    - 私的所有権とは異なる所有のあり方を考えるべきではないか？
- **所有と責任**
  - 所有権の主体が負うべき責任がある。所有による利益享受だけではなく、所有によって生じた結果に対しても責任を負うべきである。　→責任を負える程度の所有＝ほどほどの所有
  - 責任を負えないが所有せざるを得ないこともあり、所有と責任を強く結びつけるのは酷すぎるのではないか？　例：固定資産税、森林管理、ゴミ
  - 所有と可処分性の関係を見直す必要がある。　→その際には、所有権を認める権威者が何（あるいは誰）かを考えることが重要ではないか？　例：芸術作品の可処分性
  - よき所有者であることと、多くを所有することとは異なる。(所有の量と質)　→よき所有者であることの条件を考える必要があるのでは？

今回の哲学カフェでは、こうした様々な論点が対話の中で少しずつ析出されてくるダイナミズムを比較的はっきりとつかみとることができ、進行役として手応えを感じることができた。「環境は誰のものか」という問いを起点として、環境問題を直接的に考える方向ではなく、所有なるものの問題性へと対話が深まっていったのは、哲学カフェの面目躍如だろう。

また、今回は、哲学カフェと、同日に南山大学にて開催されたシンポジウム「環境と経済を両立させるのは誰か：環境問題の起源と持続可能な発展の担い手」とを緩やかに連動させることが試みられていた。哲学カフェで原理的なことがらについて対話が導くままに問いを掘り起こしつつ語り、そうした語りから得たものをそれぞれの参加者が引き連れながら、講話と討議が中心的な作法となるアカデミックなシンポジウムに参加して、さらに自らの問いを深める。こうしたことを目指した試みであった。幸い、多くの哲学カフェ参加者の方々が、シンポジウムにも足を運んで下さった。

今回の場合、シンポジウムテーマが環境学と経済学に関連するものであり、一見すると、哲学的な問いとの接点をみいだすのが容易ではないように思われたかもしれないが、それゆえにかえって、抽象的な思考と具体的な思考との往復にはうってつけの組み合わせであったとも思う。欲を言えば、対話で思考した後に、講話と討議に触れて単独で思考し、さらにその後に再び対話での思考に戻ることができれば申し分のない「哲学する一日」になっただろう。その意味では、シンポジウム後の懇親会に参加した方々は、それに類する経験をすることができたのかもしれない。

もちろん、その成否や収穫は、哲学カフェと同様、それぞれの参加者自身に委ねられている。私自身は、哲学カフェと様々な学術イベントとの連動企画は、それが学術イベントへの動員に利用されてしまわない限りで、人々の哲学的思考を刺激するものになりうるという可能性を感じることができた。名古屋では日々多くの学術イベントが開催されている。ジャンルにかかわらず、哲学カフェを楽しんでからそうしたイベントに足を運んでみる（そしてできれば、その後の茶話会＝対話第二幕も行う）日がたまにあってもいいかもしれない。